『えちぜん・わかさ』創刊号

―「福井民俗の会」新発足―

福井民俗の会（会長福大教授杉原丈夫氏）がこのほど発足し、機関誌『えちぜん・わかさ』を創刊した。ときあたかも柳田国男生誕一〇〇年に当たり、戦後二〇数年間休止状態にあった福井県民俗学会の再スタートとして、各方面から注目を浴びている。

同誌の「発刊のことば」のなかで、杉原会長は、「これまで市町村誌といえば、歴史と地誌に限られていたが、この二、三年来民俗編一巻を加える傾向が生じている。また、各地の学校や婦人団体などで、自分の住む町や村の伝承を収集記録する仕事もさかんになされている。人々の眼が政治的支配の歴史よりも、常民の生活史―つまり自分自身の過去に向けられるようになったのである」と述べ、発刊のねらいが、「第一には郷土研究の中心をわれわれ常民の生活史におくことであり、第二には一般の人々に自分の町や村の伝承を気軽に調査報告する場所を設けることである」と強調している。

たしかに最近郷土の伝承に対する関心がとみに高まっており、「ふるさとの心」の再発見が強く叫ばれているときだけに、本会の発足は誠に時宜を得たものとして高く評価したい。

発起人は、杉原丈夫・斉藤槻堂・藤本良致・朝比奈威夫・小林一男の五氏で、去る四月一二日の初会合で、昭和二四年に『若越民俗』二号が刊行されて以来活動を休止していた福井県民俗学会を再出発させることに意見が一致し、機関誌は当分の間、年二冊を出刊することになったのである。

創刊号では、小林一男氏の「めでたき盆―若狭新庄日録抄―」・「畦塗りと山芋掘り〈柳田国男からの手紙〉」、斉藤槻堂氏の「福井県の食習(一)」、藤本良致氏の「松岡の方言―漁業・狩猟・竹細工―」、杉原丈夫氏の「足羽神社考(一)」、朝比奈威夫氏の「宮座における女性の役割―若狭地方の事例から―」の計六篇を収録している。各氏とも県下民俗学界ではひときわ精彩を放つ人物でもあり、それぞれの論稿には、ユニークな筆致のなかに従来の調査研究の深さが遺憾なく発揮されている。

これからの活動として、差し当たり明年度は、文部省の緊急民俗調査費の給付を受けて、若狭湾沿岸の「産小屋・産育習俗」の共同調査を目論んでおり、今後会員読者の本会への積極的加入が大いに期待される。

（三上一夫記）